

# 末黒野

すぐろの



5月号  
(通巻897号)

# 三角巾

森清堯

青木の実子らそれぞれに持つ望み  
寒鴉枝の定位置ずらし立ち  
涸川のむき出しの岩鷺一羽  
弧を重ね鳥どち飛び来春隣  
寒日和裸の耳の高感度  
凍晴へ鋭声を残す鴉かな  
三角巾に腕の重み寒の内  
片腕の使へぬ不如意寒土用  
ままならぬ肩を戻さむ豆を撒く  
立春の空そこぬけとなりけり  
薄氷や朝日とどむるひとところ  
枝移りの栗鼠の片鳴き春動く

瑞声

# たんぽぽ

黒滝志麻子  
(顧問)

早春の日差しを溜むる暇かな  
春灯のひとつの点る家親し  
たんぽぽや二輪車父の手を離れ  
風光る自立の道の小買物  
春水に手の平大き男の子  
鶺鴒色の風船晴れの空を飛ぶ  
雨あとの日を散りばめて揚雲雀  
アスパラガス朝の厨の白き皿

# 甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



## 春隣

岡野里子

日溜りや藁を褥に福寿草  
大寒や晨鐘の音の重々し  
隣家より洩るる歌声春隣  
色めける木々の梢や春近し  
生籬の雀合戦春隣  
節分や追へど居坐る天邪鬼  
ほとばしる蛇口の水や春立てり  
芝を踏む足裏の音や春めきて  
句点打ち生るる余白月朧  
稲荷社の狐動ぜず春一番

## 春雷

菅野日出子

寒月を仰ぎて家路はるかかな  
風花や町ひつそりと自肅令  
千両の実の一つだになき朝  
懐炉背に句帳片手の散歩かな  
散る紅葉払ひて願ふ御寶頭盧  
煮凍や昨夜の団欒思ひつつ  
墓地裏の見返り坂や夕時雨  
豆撒きのつぶやく程の子等の声  
春雷の一喝に散る鳥どち  
シャッターの閉まる街並猫の恋

## 迎春花

田中臥石

病室の梅花明かりの窓へ寄る  
すいせんの花や面会謝絶札  
病床へ春の日射しや身を起す  
妻が来て梅花の路を退院す  
迎春花夫婦相病み籠りけり  
我が妻も同じ主治医や春夜変  
子を生ると孫の電話や梅真白  
春潮の渚に佇ちと妻癒える  
明眸の少女と春の渚往く  
雛の間の句座や末黒野浜木綿会

## まほらの大地

森清信子

磐梯山に思ひを馳せぬ冬茜  
触れたらば火傷しさうや雪女郎  
一閃のヘッドライトや枯木立  
濁りなき空波立たせ白鳥来  
首伸べて声蒼天へ大白鳥  
消毒の後の俎始めかな  
故郷の記憶 飴色 薺粥  
金縷梅の黄のこぼれ初む日差かな  
春寒し人まばらなるアーケード  
流木をもてあそぶ波冴返る

## 胼の手

石黒興兵

蒼天に溶け込むばかり冬桜  
緋も白も蕊は黄色や寒牡丹  
羽撃きの出来る間合や浮寝鳥  
医の待合に咳一つ無き寒九かな  
追はずとも飛び立つ構へ寒雀  
焚火に手を遠き日かへる迄かざす  
胼の手を隠しほほゑみ絶やさざる  
立春の山畑起伏無かりけり  
神木の注連の幣揺れ春の雨  
青空を大きく受けていぬふぐり

## 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



冬日燦

加藤静江

青銅の大屋根の紋冬の燦  
大祖堂 百畳敷の寒極む  
人氣なき浜を占めたり掛大根  
人声の絶えたる路地や雪催  
さきがけは白き一輪臥竜梅  
仁王像へあいさつの児ら麗らけし  
立春や冠羽なびかす鷺一羽

びんつけ

小田嶋野笛

露のたう

斉藤マキ子

入線の始発電車や飾して  
見番へ髪付匂ふ門礼者  
起きぬけの珈琲にがき狗日かな  
鉄板へもんじやの仮名の試筆かな  
千円の浪費始めや福袋  
牛日やカレー南蛮食ひに出て  
茶殻の香残し静かや初筍

街はなほ眠りの中や薺打つ  
鋤き均し水引くばかり谷戸の春  
春立つや森林の香の入浴剤  
耳あてて櫂の春を確かむる  
ほろ苦のほろが好きなり露のたう  
黄ばみたる象牙の判子建国日  
石ころの徑に出てより梅匂ふ

コリア庭園

堺 昌子

春浅きコリア庭園石榴の木  
三ツ池の大木なりし椿咲く  
三ツ池の処々や竜の玉  
三ツ池の染井吉野の芽吹きかな  
早春賦 歌ひ少年卒業す  
春障子水かげろふを踊らせて  
あま色の髪 of 青年青き踏む

冬ぬくし

高木 邦雄

雪しまく鉄橋過ぐる貨車長し  
琴線に触るる一句や冬ぬくき  
満天に星の零るる寒夜かな  
殿の仔馬 飛び越ゆ 潦  
昨夜の雨春菜に残る一滴  
存問の友の電話や春の宵  
風紋の砂丘の空や月朧

犬ふぐり

長尾タイ

七重八重逆巻く怒濤春疾風  
鳥帰る落暉に染むる漁舟  
長汀に犬引く少女春の彩  
豆を打つ日毎に増ゆる一人言  
優さの晴る百花数ふる犬ふぐり  
雲寄せぬ十字架の空冴返る  
屋敷神の朱の濃き鳥居月朧

春一番

今村千年

風立ちて野は梅が香の園となる  
梅見茶屋連れの蘊蓄きりもなく  
籠り居や枝折戸叩く春一番  
足裏に大地の鼓動春兆す  
栈橋にクルーズ船や春乗せて  
糸垂れてひねもす春を釣りにけり  
鍬入れて大地の春を起しけり

寒 行

大川 暉美

かつかつと路地行くヒール寒の朝  
風尖るひと日や林泉の枯芭蕉  
寒行や水一杓を身にそそぎ  
小声もて夫の豆撒き一握り  
寒満月等身の濃き影一つ  
微睡の時を奪ふや恋の猫  
春風や谷戸の一川光らせて

寒の明

太田良一

顔を手の叩く洗顔寒の明  
裏山の畑へ人声寒の明  
一粒に三度のお辞儀雀の子  
天帝の委細構はず鳥帰る  
啄みて土に刺繡の雀の子  
礼節の国は何処に鳥帰る  
春浅し防空壕を隠す宮

インバネス

岡田史女

産土の社のはるかや風花す  
白陀師に似たる姿やインバネス  
父のこと殊に師のことインバネス  
寄りわかれ鳴き交はしては鴨の群  
吹き荒るる風の日や花ミモザ  
合格の知らせ届くや夜の地震  
日脚のぶ杉の香りの匏屑



# 青炎集

## 森清 堯選

横浜 鍋島武彦

疫病禍の怨みつらみや初日記  
お互ひの若さ着に年の酒  
うつなき世にも明かや冬の薔薇  
熱熱の風呂吹舌に転ばせて  
地震かな朝餉の卓の寒卵  
大寒の賑はひなほも中華街

大網白里 岡井マスマミ

横浜 飯田久美子

一部屋に籠もる暮しや鬼やらひ  
二度干しの目刺の青を深めけり  
春炬燵やうやく通す針の孔  
サスペンスドラマに涙シクラメン  
農の家に濠の名残りや春の水  
春の日や小川の堰の音溢れ

横浜 池乗恵美子

川崎 滋野 暁

フォーカスは鴨の群れへと息をつめ  
落葉踏む音引き寄する故郷かな  
街川の水音硬し寒昂  
きはふ葉の香の立ちのぼり野水仙  
寒明けの空の憂ひのなかりけり  
紅ふむ梅の一朵や段葛

多摩堤鳥の子色に枯れにけり  
草枯の土手や数多の土の塊  
関守石の置かれたる露地寒椿  
三重吉の歌碑の傍梅二輪  
梅が香や碑に寄る猫の大あくび  
庭隅の赤き祠や藪椿

横浜 上野静子

横浜 宮元陽子

立ちそろふ絮のぼうずや石露の花  
行きゆきて探梅の崎夕日影  
臘梅の丘に遊びて一日過ぐ  
約束を反故にせる邪気寒四郎  
小豆粥噴く亀甲の綾を噴き  
早春の秀つ枝ふくよか段葛

月氷る玄界灘や尖る風  
冬落暉馬影大きく迫りけり  
防人の立ちし海荒れ寒の月  
今生の別れに振る手冬銀河  
日捲りを帰る日へ剥ぎ旅旅  
馬の仔の馬柵にすり寄り朝まだき

横浜 岡美智子

横浜 梅田 武

長息や居座る冬をやり過し  
黒光りの大師の像や風花す  
撫牛に指一つ触れ初大師  
不揃ひの石段の影春近し  
二人していふ独り言春隣  
袖口をぐぐつと伸ばす余寒かな

噓するほど熱爛の爛熱くして  
日向ぼこ黒糖の飴ころがして  
辛口の地酒潤目のひと焙り  
街川のネオン張り付く霜夜かな  
受験子の只今の声ブイサイン  
清白やミニすつきりと受験生

平塚 尾崎千代一

大網白里 亀卦川菊枝

靴脱ぎに医師の長靴雪糞り  
春めくや水底ゆらす稚魚の群れ  
印判の皿の山河や建国日  
春光を掬ふ両手や潮溜り  
光風や太極拳の師を囲み  
ラジコンのジープ駆くるや春の浜

冬の鴟数で報ずる疫病の死  
入院の長びく夫や寒夕焼  
青天の日の香あつめて梅白し  
梅薫るこの世に戻り来る夫  
犬ふぐり門歯の抜けし子の笑顔  
眼射る湖の光や木の芽風

# 耕 土 集

岡野 里子



早曉の霧笛の頻り霽降る  
虎落笛昭和の家のトタン屋根  
まんさくの糸の乱れや雨滴  
**うらうらと寄生木風の秘密基地**  
梅瑞枝飛行機雲の一筋へ

横浜 内山 みち

けんけんの少女の拾ふ福の豆  
建国日のリモート会議空回り  
**不確かなる目分量とふあたたかさ**  
籠居や芽吹き促す風柔し  
編み直す詩の一行春秋

横浜 岩崎 藍

産土の大气満ちたる初山河  
おもむろに鼓動高鳴る初明り  
葛湯溶く妻や吉野のみやげとて  
裸木の影の黒々夕日落つ  
**手繰らるごと臘梅の花の中**

横浜 小林 拓路

エトランゼ驚きとなる霜柱  
**逆光の池面や映る蓮の骨**  
塩鱈の鍋の連夜や風の音  
甘すぎず且つ焦げすぎず太鼓焼  
家苞の小石と蓬下校の子

横浜 小長谷 紘

夫の忌の空に黙礼寒雀  
風に鳴る鈴生りの絵馬春近し  
**ちと飽くる三猿ぐらし春炬燵**  
ビル街に雨を孕みて木々芽吹く  
窓打ちて紅絹のはたきに春立たす

横浜 市川 夏子

邪気払ふ両手に余る年の豆  
**立春の畑の遠近人の影**  
春嵐ベダル踏む子の顔険はし  
日だまりの地に触るるほどしだれ梅  
譲り合ふ散歩の犬や犬ふぐり

横浜 佐藤 勝代

撒かれたるパンに崩れぬ鴨の陣  
初参地蔵の赤き涎掛け  
春疾風ありえぬ噂聞きにけり  
知らぬ名や鉢いづばいの草青み  
**芽柳の揺れて風知る夕べかな**

横浜 小池 桃代

**焼芋や香に誘はれて夜の道へ**  
寒雀夕日の枝に寄り添ひて  
白梅のひらきそめたる宮居かな  
冴返る小学校のベルの音  
薄紅の乙女椿や風連れて

横浜 鈴木千恵子

冠雪の富士裾野まで眩しけり  
**ちやん呼びの友や元氣と初電話**  
夫採るや匂を味はふ露の臺  
白梅や小枝総じて天を向き  
リモートや手を振る母と春の夕

横浜 大庭美智代

垣根よりこぼるる紅や枝垂梅  
拾ひたる真白き一つ落椿  
**珈琲を手に懐メロや春日和**  
春雨の湯気立ちのぼる畑かな  
足許に顔出す土筆二三本

横浜 大辻美知女

晴れ渡る空へ白梅吸はれぬて  
**春風や睡る花芽をくすぐりて**  
ふはふはと風と戯れ石鹼玉  
川面に立つ三角波や風光る  
日輪の光を色に花菜かな

横浜 鈴木 英雄

日溜りの秀枝やふむむ寒紅梅  
終日や寒気よびこむ小糖雨  
雨の日の走り根埋め紅椿  
籠居に春一番の来たりけり  
縁側の木目の艶や春の風

横浜 秋山 文子

初春の空を統べたり観覧車  
初雪のたちまち消えて銀忌  
こもごもに潜る速さや鴨の陣  
**一对の耳語の羅漢や四温晴**  
白障子開けて局の化粧の間

横浜 小原 紀子

落日の光芒海へ冬の果  
開け放つ空き家の窓や紅椿  
庭土に数多のいのち春の雨  
グランドに揃ふ掛声下萌ゆる  
春潮や鷗は低く鳶高く

鎌倉 伊藤 美緒